

# ランバス留学レポート

加藤 雅俊 准教授

私は、2012年4月から2014年3月まで2年間、ランバス留学の制度を利用して在外研究を行いました。2013年12月までは、アメリカ・西海岸にあるカリフォルニア大学バークレー校（UCバークレー）、それ以降はイタリア北西部のミラノにあるポッコロニ大学に滞在しました。この留学における研究テーマは「アントレプレナーシップと産業ダイナミクスに関する実証研究」で、主に、日本のスタートアップ企業のデータを用いて新規企業の生存・退出およびイノベーションの決定要因について実証的に研究しました。日本においては、残念ながら当該分野の研究者が限られており、欧米に比べると研究があまり進んでいません。滞在先では、この分野で多くの研究者が揃っており、頻繁に開催されるセミナーに参加して最先端の研究報告を聞いたり、大学の講義に出席して勉強したり、新たな共同研究を開始したり、充実した研究生活を送ることができました。

ここでは、2年間の研究滞中で特に印象に残っていることを何点か記しておきたいと思います。この研究滞中にまず何より感じたことは、欧米のトップレベルの大学に在籍する研究

者は研究成果の発信に対する意識が非常に高いということでした。当たり前ですが、研究者は日々研究活動を行い、その研究成果を対外的に発信していくことが求められ、最終的には論文を査読付き国際学術誌に掲載することこそが研究者として評価されます。幸いにもこういった意識を持つ同じ分野の同年代の研究者と日頃から接することができ、大変刺激を受けることができた。当該分野で評価の高い学術誌にいかにか論文を掲載するかということは私自身も学生時代から常に意識していることですが、滞在先の研究者との議論もこの点を強く意識して活発に行うことができたことは大変有意義であった。

もう一点印象に残っているのは、大学の講義における学生の姿勢や勉強に対する意識についてです。UCバークレーではイノベーションに関する講義（学部・大学院）に出席していました。そこで印象に残っているのは、講義における学生の積極的な姿勢です。受講者の多くは疑問点があるときやより詳しく知りたい時は、挙手して担当教員に質問をぶつけていました。また、教員も学生に対してたびたび問いかけて

意見を求めていました。日本の大学の講義では、多くの場合は、履修者の数が多く大教室で行われることも多く、双方向の議論ができていない状況だと思えます。無論、講義の特性によっては双方向の議論が不要な場合もありますが、経済学の応用分野においては学生に考えさせてじっくり議論することが必要な場合も少なくありません。この点は教員として色々と考えさせられ、今後の自身の講義の参考にもなりました。

最後に、2年間という長期にわたって在外研究を許可してくれた本学に感謝すると同時に、またこのような機会に恵まれればと願って止まない。